

小学校の先生方にも知ってほしい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」

幼児期の子どもたちは、「遊び」を通して学びの土台となる資質・能力を身に付けていきます。この資質・能力を義務教育以降の学びにつなげ、伸ばしながら教科等の学びにつないでいくことが大切です。そのためには、「幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿」を手掛かりにし、園と小学校等が、共通な視点をもって子どもの姿をとらえていく必要があります。

「10の姿」とは、どんなものですか？

Q1

幼児期において育みたい資質・能力が育まれている幼児の具体的な姿を10個にまとめたものです。

A

※10の姿は「育ってほしい姿」であって到達目標ではありません。ですから、すべての子どもに同じように見られるものではありません。園では、「10の姿」を念頭に一人一人の発達に必要な体験が得られるような状況をつくり、必要な援助を行ったりしています。

健康な心と体

自立心

協同性

道徳性・規範意識の芽生え

社会生活との関わり

思考力の芽生え

自然との関わり・生命尊重

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

豊かな感性と表現

どうして小学校等でも「10の姿」が必要なのですか？ 園のものではないのですか？

Q2

「10の姿」は幼児期においてのみ重要視されるものではなく、義務教育以降の学びの基盤となるものです。例えば、保育参観や子どもたちの交流といった場面で、園の先生と小学校等の先生が、「10の姿」という共通の視点に基づき、実際の子どもの姿について語り合うことで、より具体的に子どもの育ちと学びをつないでいくことができます。

A

例えば

幼児と児童の交流活動の中にどんな学びがあるのでしょうか？

【例 おもちゃまつり】 ※ 交流の前には、園と小学校等それぞれのねらいを共有してから実施しましょう。

「ぼくたち、的当て用のボールがいくつあるか数えてみたら50個もあったよ。」「あの一番小さい的の得点が一番高いよ。」「得点用紙に得点を書くから持ってきてね。」「ボールを投げるスタートの位置が遠すぎたみたいだからもう少し近くにしようか。歩幅で数えるといいかな。」などと、長さを測る活動が始まった。仲間と一緒に工夫をしながら、交流を楽しもうとする姿が見られた。

「10の姿」を視点にすると、様々な育ちが見えてきますね。

思考力の芽生え

協同性

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

言葉による伝え合い

check!言葉から想起されるイメージは各々異なるので、協議の際は「項目名」だけでなく「10の姿」の「説明文(文言)」にまで着目しましょう。例えば【数量や…】では、このような姿が示されています。

【数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚】

遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚をもつようになる。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりに子ども達の様々な育ちや学びを見取り、育まれつつある力をさらに伸ばしていくにはどうしたらいいか、園、小学校等それぞれの教育を見直していくことが大切です。

「架け橋期（5歳児から1年生の2年間）のカリキュラム」は、幼保小の先生が協働し、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」を手掛かりとし、策定していきます。

【参考】令和4年 文部科学省 幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き(初版)

